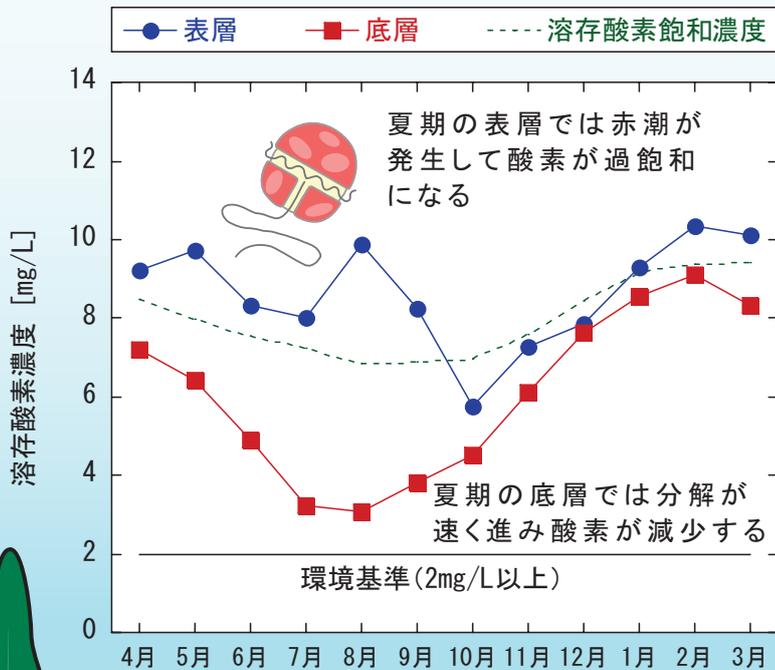


大阪湾の再生に向けて

水中に溶けている酸素（溶存酸素）濃度は、水温と塩分濃度によって変動しますが、1ℓあたり約8mgしかありません。そのわずかな酸素を利用して、魚をはじめ、大半の水生生物が生きています

しかし、大阪湾のような閉鎖性水域は、外海との水の交換が悪いために、河川から流れてくる有機物や窒素・リンといった汚濁物質がたまりやすく、またそれを栄養として特に夏場に植物プランクトンが発生しやすくなります。赤っぽい色のプランクトンが大量に発生する現象を赤潮といいます。そのプランクトンや河川から流入した有機物が海底に沈んで分解されると、底層の溶存酸素が消費され、貧酸素水塊が生じます。これにより、大阪湾では底層生物がすめない水域が増大しています。

これを改善する方法の一つに浚渫^{しゅんせつ}（水底の砂泥を掘り取ること）がありますが、私たちは大阪港湾域において底質調査を行った結果、汚濁負荷は河口域で特に多く、河口域を中心に浚渫することが効果的であることを明らかにしました。研究所では、豊かな大阪湾を取り戻すために、さまざまな取り組みを進めています。



大阪港湾域における過去5年間の月別平均溶存酸素濃度

（都市環境担当 新矢将尚）